

Town

第1節 移り変わるまち

生き残る第一次産業を支える地域

第一次産業の存続、それは都市の魅力ある空間を守ることでもある

都市化の進展にともない、市内の農地は昭和30年代後半から40年代後半にかけて、急激に減少した。しかし、50年代にはいりようやくそれにも頭打ち傾向が見られ、現在はゆるやかな減少傾向を見せている。これは農家数にも同じ傾向が見られる。

農業生産の内、約6割は野菜がしめており、こまつな、ほうれん草、キャベツなどは市中央卸売市場でもかなりの占有率をもっている。

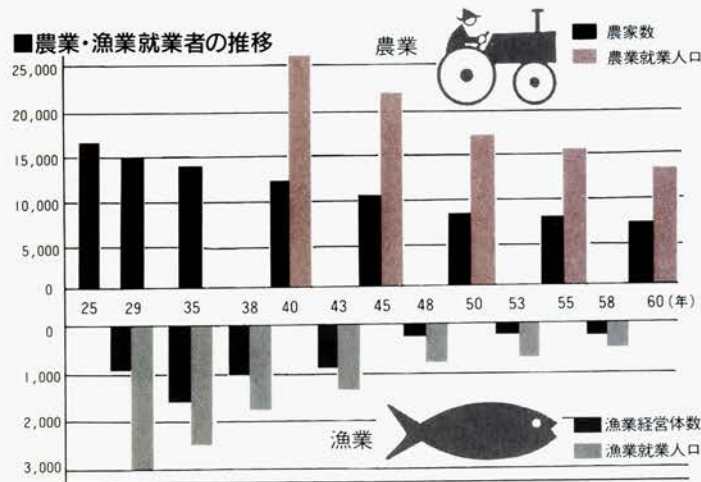
漁業についても、東京湾の埋め立て、水質汚染の深刻化にともない、30年代後半から、40年代後半にかけて従事者は急激に減少した。しかし、最近ではほぼ横ばいとなっている。また、水揚量についてもシヤコ、かれいなどを中心に横ばい、ないし微増傾向が見られる。

このように農・漁業とも、50年代以降に衰退傾向がおさまり、現在ではむしろ定着傾向が見られるが、それを端的にあらわしているのが若

者たちの「Uターン現象」であろう。農業については地価の高騰も背景となっているが、かつては見放されようとしていた農・漁業も、工夫次第によっては生計をたてうるものとなることが分かり、それによって人がもどってきた。

これらの、いわゆる第一次産業を支えているのは、田畑であり海である。現在ではこれらの場所は、緑地やオープンスペース、あるいはウォーターフロントとして、横浜市における貴重な自然的空間となっている。そして、共通して言えるのは、これらの場所は、ひとたび都市的利用がなされると、ふたたび元にもどることはないということである。つまり、第一次産業の存続は、都市における自然環境の保全につながるということである。

都市を構成するひとつの貴重な空間として、もう一度、第一次産業を支えている地域を見なおしてみる必要があるのではないだろうか。



横浜市「横浜市の農業」漁業センサス



定着傾向が見られる都市農業